

「市民による復興まちづくり協働事業(旅籠・旧えびや再生プロジェクト)」事業

しほがま  
港町として発展した塩竈の歴史と文化を伝え、  
大震災からの復興のシンボルとなる建物を保存

膨大な被害を出し、大きな悲劇をもたらした東日本大震災だが、歴史的な文物や遺構もまた各地で姿を消しつつある。たび重なる震災や津波から生き残り、港町としての繁栄の記憶をとどめる建物を継承することで、大震災からの復興のシンボルにしたいという願いを込め、「NPO みなと しほがま」が、その保存・再生活動に取り組んでいる。

明治初期に建てられた木造3階建てとして  
建築史的にも価値を持つ旧えびや旅館

古来より歌枕として数多くの文人墨客に愛されてきた東北有数の港町・塩竈。この地もまた2011年3月11日の大地震による衝撃や津波の浸水により、長きにわたり町の景観として親しまれ、歴史や文化を伝える貴重な建物が姿を消しつつある。そのひとつ、塩竈のシンボルである御釜神社の向かいにある「旧えびや旅館」(震災当時、茶舗として営業)も、13年2月の公費による解体期限を前に、解体されようとしていた。その解体を止め、後世に残し伝えていこうと立ち上がったのが、NPO みなと しほがまである。

「建築史の専門家である東北工業大学の高橋恒夫教授に緊急の建物調査をお願いしたところ、明治初期に建てられた木造3階建ての極めて珍しいものであり、内部には港町の旅館・遊郭として栄えた面影をとどめる意匠

が残されていることなどが明らかになりました。それを受けて開催したシンポジウムや見学会において、出席者から『何とか残してもらいたい』という意見が多数出され、募金も集まったため、当NPOとして、旧えびや旅館の取得・保存に取り組むことになりました」と、事務局の大和田庄治さんが経緯を説明した。

塩竈は慶応三年(1867年)に大火に見舞われ、それ以後も明治三陸、昭和三陸、チリ地震による津波などにより大きな被害を被ったが、そのつど復興を果たしてきた。「そうした歴史を物語る遺構として、あるいは大震災からの復興の象徴として、旧えびや旅館を保存・再生し、次世代に継承していくことも、私たちにとって必要な事業だと思いました」と語るのは、副理事長を務める高橋幸三郎さん。解体の話聞いてから、実質4か月ほどで保存・再生



月1回のペースで市民有志によるお掃除会が開かれている



今後の活用のアイデアを聞くために行われている車座会議



大震災後の片付けを終えた旧えびや旅館



1月に行われたイベントの案内のために作られたチラシ



ひなめぐりイベントの会場にも使用された

へと踏み出すことができたのは、それまでの経験や実績があるからで、NPO みなと しほがまの歴史的建造物保存活用部会にとっては、旧法蓮寺向拝、旧亀井邸に続く第三弾の活動となった。

市民目線での利活用を考えるために  
実施しているお掃除会やモデルイベント

旧えびや旅館の保存・再生活動として、NPO みなと しほがまでは市民に声をかけ、お掃除会を企画、これまでほぼ月一回のペースで実施しているが、掃除のたびに往時の面影が復活しつつある。また、建物の保存にあたって耐震診断を行ったが、その際に市民対象の見学会を実施したところ、多くの方が詰めかけたうえ、テレビや新聞などのマスコミも取材に訪れた。お掃除会などの機会をとらえ、NPO みなと しほがまでは参加者から活用について意見を聞く車座会議を開いている。「こちらが活用の形を押し付けるのではなく、あくまでも市民のみなさんが望む形での活用を考えていきたい」と、高橋さん。

担当者より



助成のおかげで  
今後の活用の  
目途が立ちました。

NPOみなと しほがま  
副理事長  
高橋幸三郎さん

われわれは「知る」と「伝える」ことを目的に多角的に「塩釜学」に取り組んでいるNPOですが、この旧えびや旅館の保存・再生でも、そのコンセプトを反映させていきたいと考えています。市内外の人々に愛され、さまざまに活用されていく姿を想像するだけで楽しみが広がってきます。今回は助成をいただき、ありがとうございました。

今後の活用のモデル事業として、今年の1月3日～4日に、「しほがまみなと昔ばなし」というイベントが旧えびや旅館を会場に開催された。1階を塩釜のスイーツが楽しめる「まちかどミニカフェ はれま」とし、2階大広間では東北学院大学教授の斎藤善之さんによる歴史トークショー、塩釜の古地図や古写真の展示などが行われたが、2日間で約450名が来訪した。こうしたお掃除会や車座会議、建物改修、資料展示のためのパネル製作などに、AJOSCからの助成が活用された。

「今回のイベントでは、来訪者を対象に今後の利活用に関するアンケート調査も実施しましたが、やはり1階はミニカフェ的なもの、2階は資料展示や各種イベントの会場という声が多く寄せられました。気軽に立ち寄って街歩き疲れを癒し、さらに塩釜の歴史や文化に触れられる“まちかど博物館”的なものになっていくのではないかと、さらに地域のコミュニティセンター的な役割も期待できます」と、高橋さん。「すでに、祭りのお休み処、スイーツカフェ、地酒の試飲会、まちゼミなどの会場として活用したいという声が届いています」と、大和田さん。そうした展開が期待できるのも、旧えびや旅館が解体を免れ、残されたからである。塩釜を知り、その魅力を伝えることを活動の両輪とするNPO みなと しほがまの今後の活動が楽しみである。